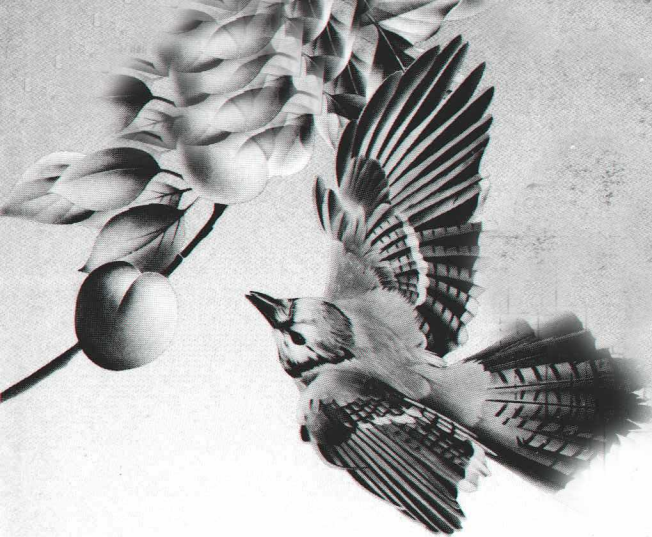


蒼空に出逢いを求めて
桐島洋子





蒼空に出逢いを求めて



桐島洋子（きりしま・ようこ）

1937年東京に生れる

『淋しいアメリカ人』で

大宅壮一ノンフィクション賞を受賞

主著・『風の置手紙』対談集『人間直言』

『ボトムレスUSA』『つよい女は美しい』

『生きることを熱烈に愛する40のおはなし』

『女がはばたくとき』

『聡明な女は料理がうまい』

蒼空に出逢いを求めて

1976年5月20日 初版発行

著者 桐島洋子

発行者 大邊 豊

発行所 PHP研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11

電話 (075)681-4435 出版部

印刷 東洋印刷株式会社

©Yoko Kirishima. Printed in Japan 1976

0012-169100-7159

乱丁・落丁本はお取り替えいたします

（定価はカバーに表示してあります）

蒼空に出逢いを求めて

——目次

1・ユニークな武器を片手に 7

——U・S・A 横断三人娘

2・冒険者の条件を考えるために 18

——パリ、カリフォルニアの二女性の場合

3・小公女からヒッピーへの変身 33

——ニューヨークのジュニア

4・美しく愛に生きる女たち 48

——ニューヨークにふさわしい人々

5・自立する女へのプロセス 63

——太陽がいっぱい、カリフォルニアの青春

6・豊かな才能の枝を繁らそうと 75

——ヨーロッパ、U・S・Aでスタイリスト修業

7・ショービジネス世界の妖精 89

——ロンドンの永積泰子さん

8・“執行猶予の青春”を疾走 104

——スペインに賭ける愛と希望

9・自由への讃歌を！ 119

——ポルトガルのサラとマリア

10・二重のエキゾティシズムの国で 133

——ユーゴスラビアの人々と精神

11・さわやかな潮風のように 147

——サファリの国、タンザニアの椿延子さん

12・大地に根ざした民族の魂を 162

——アンデスの高野潤さん

13・勇猛果敢なヤマト・アマゾネス 174

——カメラを肩にインド、英国へ高田一江さん

14・逞しく優美な骨董に魅入られて 186

——倉敷・東京・パリの細野夫婦

15・戦争の終わったあと、若者は…… 200

——ベトナムのグエン・コック・カンさん

16・触れあいからすべては始まる 210

——若者のためのサロン作り——近藤夫婦

17・生きることとは出逢いそして旅 224

——私にとっての旅のイメージ

あとがき

蒼空に出逢いを求めて

装幀
石岡
怜子

1・ユニークな武器を片手に

— U・S・A 横断三人娘

おめでたき無知な旅人たち

私がアメリカのロスアンゼルスに住んでいたとき、母がはるばる日本から娘と孫の顔を見にやってきた。彼女は昔からの船旅きちがいだから、太平洋を越える乗物は当然船である。二週間の陽気な船旅で母はすっかり若返り、船客仲間の若者達と片端から仲良くなってしまった。そして、「娘のアパートがロスアンゼルスにあるから、あなた達も宿に困ったら泊まりにいら

っしやいよ。お客が好きな子だから大丈夫よ。貧乏暮しらしいけど、寝るところいなんとでもなるでしょ」などと、調子のいいことを言い触らしたらしい。「船でお母さんにお世話になったのですが……」という若者が続々と我家の戸を叩きはじめたのである。

男の子もいる、女の子もいる。若い、若い、みんななんという若さだろう。この年頃の私には、外国行きなんて遠い夢のようなことだった。このごろの若者はこんなに早くから自由に出歩けるようになったのかと私は驚き、そしてうらやんだ。

しかし数日をその若者達と過ごすうちに、彼等の早い旅立ちが、それだけ早い成長を意味するものでは決してないことを、私は悟りはじめた。

なんと頼りなく危っかしい無知な子供達だろう。ひとの家に泊るための作法さえも知らない。これでは外国どころか、日本の中の親類の家に泊まることさえおぼつかないと思うのに、彼等は全くケロッとしたもので、行く先々で出会うであろう未知の他人のホスピタリティーを、当然のように期待している。

これからニューヨークに向いたいという少女に、「飛行機の切符は買ってあるの？」と聞くと、「いいえ、車で行きますから」と答える。レンタ・カーを運転して行くのかと思って、「あらそう。気をつけてよ。車も道路も日本とは大分勝手がちがうから。あなたは運転にはよほど自信があるの？」と言うと、「いえ、私、運転はできません」とすましている。

驚いてよく聞いてみると、はじめからヒッチ・ハイクで大陸を横断するつもりなのである。彼女だけではない他の少女も少年も、皆アメリカではヒッチ・ハイクが常識だと思いこんでいるのだ。

「とんでもないことよ。そんな危い橋を渡るのはやめてちょうだい」

「ヒッチ・ハイクがなんで危いんですか」

「だって、あなた、どこの誰ともわからない人間に命をあずけたいの？ 彼が女に飢えたケダモノだったらどうする。車に乗せてしまえば、あなたを煮て食おうと焼いて食おうと彼の勝手よ。日本みたいなノロノロ運転ならともかく、アメリカの車がたんフリー・ウェイを走り出したら泣いても叫んでも誰にも聞えない完全な密室だし、ちょっと走れば人気のない砂漠や山奥がいくらでもあるわ。途中で飛び降りたら即死するだけよ」

「でも、ヒッチ・ハイクで旅行した友達は沢山いますよ。皆、とても親切にして貰ったって喜んでましたけど」

「それは親切なひとと沢山いるわ、その方が多いでしょ。ヒッチ・ハイクの若者を、家に連れ帰って大ごちそうして何日も泊め、名所見物までさせてくれるようなお人好しもアメリカにはいるそうよ。でも人を殺すぐらい何とも思わない冷血動物も何食わぬ顔をして車を乗りまわしてるわ。どちらに出会うかという保証は全くないのですからね」

ヒッチ・ハイカーらしいアベックの惨殺死体が道ばたの林に全裸で発見されたというアメリカでは珍しくもない記事がのった新聞がちょうど手許にあったので見せても、このヒッチ志願の少女はビクともしない。もつともこの彼女、新聞の英語さえほとんど読めないのだということがあとでわかった。だから勿論しゃべるのも聞くのも駄目である。会話さえもなしに外国人の人のよし悪しを一瞬に見分けるほど、彼女に人相見の才能があるとは思われない。

ヒッチ・ハイクには好運があれば不運もある。好運に会ったひとは得意になってそれを吹聴するが、不運に襲われたひとは恥をさらすのがイヤで口をつぐんでいる。だからあまり表には出ないけれど、ヒッチ・ハイクでひどいめにあった日本人は少なくないと思う。ひそかな噂は私もかなり聞いている。強姦と金品の強奪がほとんどだが、中には殺されて谷底に投げこまれたまま永遠の沈黙を余儀なくされている被害者もいるかも知れない。

「私は臆病な人間ではないつもりよ。従軍記者になってベトナムの最前線で弾の下をかいぐって暮したこともあるし、スキン・ダイバーとして世界の海を潜りまわり、カリブ海の底では凶暴なフカとにらみ合ったこともあるわ。でもヒッチ・ハイクでアメリカを横断する勇氣はないわね。危険をおそれてばかりいてはなにも始まらないけれど、それが危険を侵すに値することかどうかが問題ね。たかが車代をタダにするぐらいのことが、強姦や殺人の危険に値するかしら。折角の勇氣をもっと価値ある冒険に賭けた方がいいわ」

こうして私は、何人かの若者のヒッチ・ハイク志望を粉砕することに成功した。かわりに私はグレイハウンド・バス路線の徹底利用をすすめる。一カ月九十九ドル、その後は月々三十三ドルの追加で合計三カ月間もアメリカ中どこでもいくらでも乗り放題というすてきな特権は外人旅行者だけのものである。(一九七六年現在、有効期間十五日間二五ドル、一カ月間一七五ドル、二カ月間二五〇ドルである。)

この巨大な大陸を縦横に走る長い長い道をバスに乗ってトコトコゆつくりとたどり続けた経験ほど、私にアメリカという国をよく教えてくれたものはない。走っても走ってもまだ先へ伸びそのまま無限に続くかと思われる灰色のフリー・ウェイの先端に、時折一握りのけし粒のような黒い影が現われ、それが次第に膨れて町の姿になっていく戦慄的なアプローチは、この途方もない広野を馬車に揺られて先へ先へと進み続けたかつての開拓者達の雄大なフロンティア・スピリットをいきいきと偲ばせてくれる。どんな観光案内書にもでてこないような小さな町々の表情とその住民の生活にきめこまかく、触れることのできるバスの旅は、ジェット機でニューヨークとシカゴとロスアンゼルスだけをあわただしく駆けめぐるようなアメリカ旅行よりもはるかに面白い、若者なればこそその贅沢なのだ。

これほど安上りな贅沢は他にない。バスは夜間も走り続けるから、頑丈な若者なら時々バスで眠って宿代を節約することもできる。飛行機だと空港と町を往復する足代もばかにならない

が、バスは必ず町の中心部を通過してくれるからありがたい。バス・ターミナルには、安上りなセルフ・サービスの食堂があり、決しておいしくはないけれど、大学でも軍隊でもどこでも同じ典型的なアメリカ式給食の味をイヤというほど知ることできる。また、バスの中の人間模様はアメリカという人種のルツボの底辺の縮図として観察に値する。

こう言って私は、まるでグレイハウンドのエージェントにでもなったように次々と若者を長距離バスに送りこんだが、そうなると今度は行く先々の宿泊先の紹介まで当てにされるようになる。皆、宿料などほとんど持ち合わせてはいないのである。

「お金もなしにどうやって食べたり寝たりするつもりなの」と呆れて尋ねると、「皿洗いでもウェイトレスでもなんでもやりますから」とくる。

「そう気楽に言うけど、スウェーデンあたりとちがって、アメリカは外国人の就業規則がきびしい国なのよ。どうせあなたたちは観光ヴィザなんだから、この国でお金を稼ぐのは法律違反よ。モグリで働くことは可能だとしても、足許を見られて条件は悪いでしょうね」

「はあ、そうなんですか。じゃあ、どうしたらいいでしょう」

「どうしたらいいかと言われても困ってしまうわね。だからこんなに急いでバタバタ海外に飛び出したりせず、もっと日本で勉強したり働いたりして、能力的にも経済的にもちゃんと準備をととのえてから来るべきだったのよ。でも、もう来てしまったんだから仕方がないな。さあ

どうしようか」と、私も一緒に考えてあげないわけにはいかないのである。

「大体みんな皿洗いでもなんでも致しますといったって、日本にいるときは自分が食べた食器も洗わないようなひとなんでしょう。日本ではないことがどうして外国ならできるの。その調子で外国ならバー・ガールにでも娼婦にでもなれるのかもしれないわね。なんでも経験というのも一つの考え方だけど、外国にいうと日本にいうと一貫したあなたの人生の時間であることにはかわりがないんだから、日本で行うに値しないことは外国で行ってもやはり人生の無駄費いでしょう」

どうもお説教ばかりになってしまふけれど、なにしろ相手がとてもほおってはおけない感じの子供達なのだから仕方がない。子供といってももう二十歳前後だが、なんとも幼くて、私が保護者の責任感を持たされてしまう。

「まあともかくなんとかなるかならないか行つてごらんさい」と突き放して送り出す勇気がないままに数週間わが家に居候を続けさせた少女が三人いる。トモコとナツとヒロコといった。

旅立ちのための猛烈特訓

彼女達が、食いぶちを稼ぎながら無事にアメリカを渡り歩くのは、どう見ても絶望的に思わ

れる。しかし折角アメリカまで来たからには、どうしてもニューヨークにも行きたい——ワシントンも見たいといつてきかないのである。

「ヒッチ・ハイクをやめてバス代を払ったら、もうあとは無一文なんです。それでお金も稼いじゃいけないなんて、私達、困ります」

「別に私のせいじゃないんだからそんな恨みがましい顔しないでよ。でもね、お金は稼げなくても、寝場所と食事を稼ぐことならできないこともないわ。つまり人の家に泊めて貰うかわりに労力奉仕するのよ。あなたたちがちゃんと働く気があれば、私も方々の友人の家に紹介してあげられるけど、まさかただ見物知らぬ居候を送りつけるわけにはいかないでしょう」

「働きます。大丈夫ですからお願いします」三人の少女達が一斉に顔を輝かせた。

「本当に大丈夫かしら。じゃあ、あなたたち一体なにができるの。アメリカ人の家庭でこうしたら喜ばれると思うことを、自分の能力の範囲で挙げてごらんさい」

「私、お花の免状があります」と、トモコが言い、ナツは、

「私は外人に喜ばれるからと言われて墨絵を少し習って来ました」と言う。

「外人といえば花か墨絵でオオ・ワンダフルという発想なのね。それもたまにはいいでしょうけど、日常生活には通用しないわ。もっと実際に役に立つことじゃなきゃ、アメリカ人は喜ばないわよ」